

Platform

雪、窓辺、
VRにて。

永遠に雪が降り積もる。

ここは仮想の夢の冬。

station

- VRChat : 遠郷の冬めく処
- : Milkyway Planet Train
- cluster : Crystal Forest
- NeosVR : Snow board シーズン2
- Real.W : 戸隠神社

Platform Vol.4 contents

Gravure: 星屑ノ街	4
遠郷の冬めく処(夜) VRChat	14
Milkyway Planet Train cluster	20
Crystal Forest cluster	26
Snow Board シーズン2 NeosVR	32
戸隠神社 Real.W	38
あとがき	44

第4号のテーマは「冬」。

冬というと寒さを強く意識するのは当然だが、
実をいうと暖かさを感じる季節でもある。

こたつの温もり、露天風呂で頭は寒いのに体は
暖かい。ストーブで燃える火が体の芯まで温め
てくれる。

VRで温度を感じることは難しいが、この雑誌が
心と想像に温もりを運んでいるのであればいい
と思う。

編集長

◀ To the next PLATFORM.



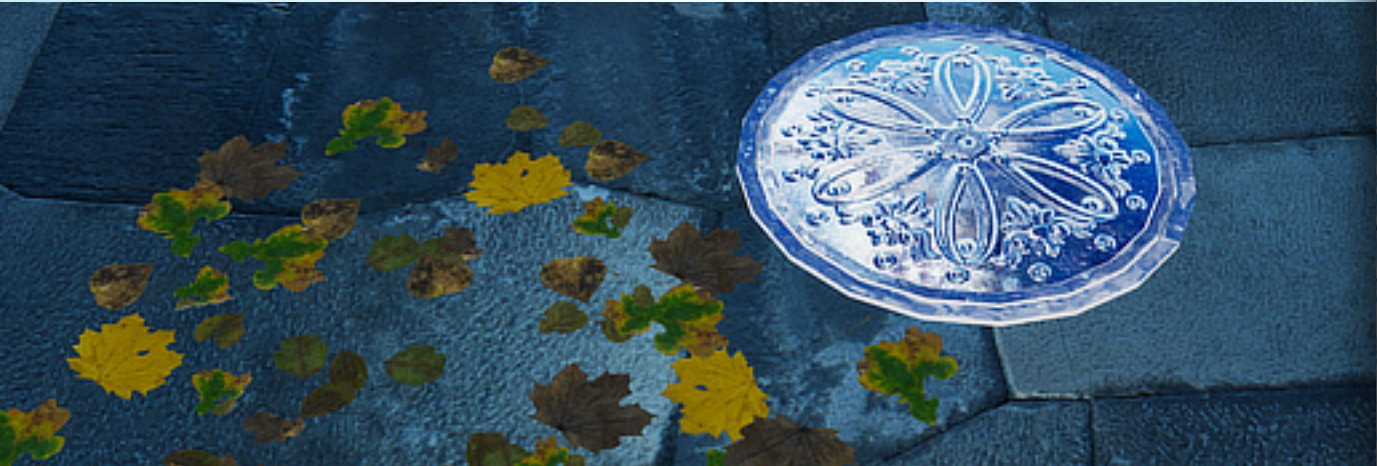
世界には、色々な町がある。
その町ひとつひとつに、駅がある。

どの町も駅もそれぞれ違っていて、
違った人たちがいて、
そこを訪れた僕たちが抱く思いも、
きっと違うのだろう。
……VRでも、Real Worldでも。

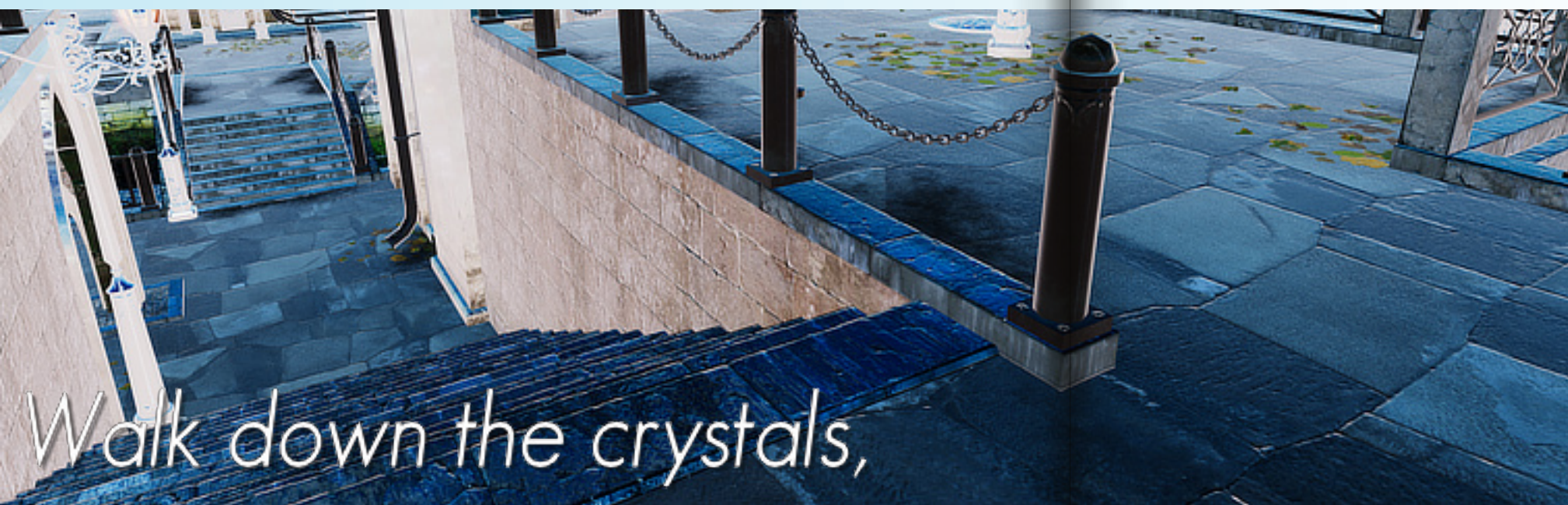
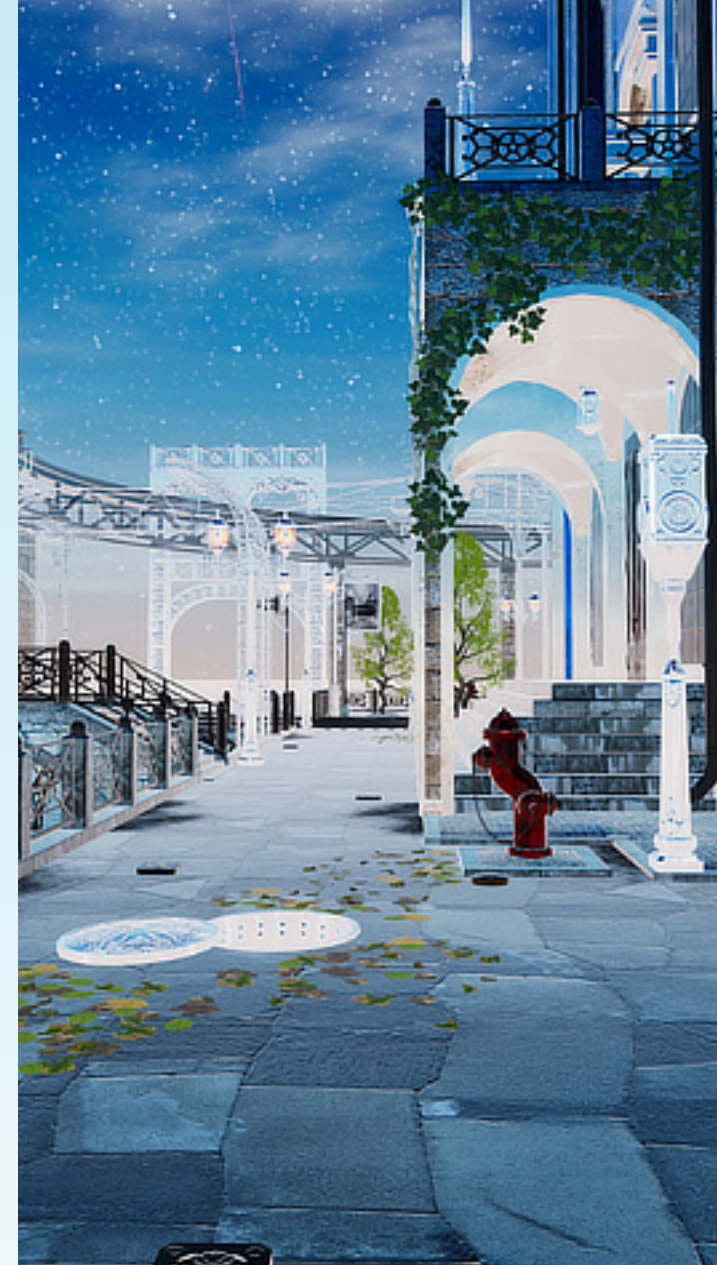
今はまだ離れ離れの「駅」を、「町」を、
あなたへ繋ぐ線路でありたい。

——それが「Platform」





さあ、
きらめきの街へ。



Walk down the crystals,



—Look up the crystals.

天に映える

無数の星



この街には、天と地に星がある。



World: 星屑ノ街 -city of stardust-

Created by yuki

仮想の温泉へようこそ。

遠郷の

冬めく処



写真/Tokikaze

川沿いの温泉旅館のあるワールド『遠郷の冬めく処』の夜。
露天風呂から出てくる湯気が本物の温泉のように演出。

訪れたくなる 川沿いの 冬の温泉

冬になると温泉旅館に訪れたいくなる。春、夏、秋とそれぞれの季節に適した風情の温泉旅館があるが、中でも冬は格別だ。山の中のバス停から徒歩で温泉旅館に向かう数百メートル。雪に音が溶けていき、自分の足音以外は何も聞こえなくなり、凍てつく寒さに自分が冬山と一体になったかのように錯覚してきた頃、ようやく川沿いの温泉旅館の灯りが遠くに見える始める。

『遠郷の冬めく夜』は、まさにそのような冬の温泉の風情をVRChat上に作り上げたワールドだと言えるだろう。雪がとつとつと降り積もっていく山中のローカル線の駅に降り立つと、ホームの向こ

う側に川沿いの温泉旅館が見える。川の手前には男女の脱衣所を併設した混浴の露天風呂があり、冬の山を眺めながら雪見温泉を楽しむことができる。ランプに灯された屋根付きの通路を歩いて川の向こうを訪れると内風呂付きの温泉旅館があり、その少し高台に和風の個室がある。温泉旅館の中は、こたつに入りながらすき焼きを楽しめる和室を除くと、全て風呂に関するスペースになっている。この建物にはベランダの足湯、身体を洗える内湯、柱に支えられるように空中に突き出た旅館の真下に位置する大露天風呂の三つがある。特に大露天風呂は、素人目には地震が起きた時に旅館が崩れたりしないのか少し心配で、おそらくVRならではの温泉旅館の建築形式なのだろう。いずれの風呂も見応えがある。

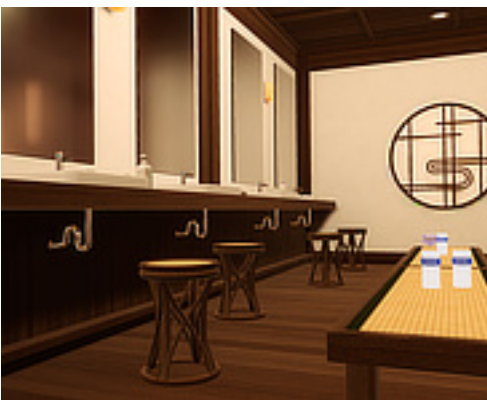
長い歴史を持つ温泉旅館は、開業当初から全ての風景が同時に出来上がったものではなく、移築や改築を経て現在進行形で変化し続けている「生きた建物」である。

例えば、箱根の龍宮殿本館は、昭和十三年に京都の平等院をモデルに建てられた「浜名湖ホテル」を戦後に解体して、芦ノ湖畔に移築した旅館だ。一方、『テ





大衆浴場の入口。左側に独特のあるロッカーに注目。番号ではなく、いろは順に並んでいる。浴場だとわかる暖簾も良し。



脱衣所。洗面所の造りが良い感じに出来ている。近くに牛乳が置いてあり、湯上がりの後に飲むのは格別。



客室の隣には広々とした足湯。ここで雪を見ながら熱燗を飲んで楽しむのもいいでしょう。

ルマエロマエ』にも登場した那須温泉郷・北温泉旅館や、山形県の瀬見温泉・喜至楼などは、開業当初から旅館自体を改築し続けており、明治・大正・昭和などの別々の時代が混在しつつ拡張し続ける迷宮のような風情が人気だ。

温泉ファンにとって、堆積した地層の中から過去の年代を探る古生物学者のように、移築や改築を施された温泉旅館の中を探索して、開業当初からの建物の変化の歴史を妄想することは、旅行の醍醐味の一つでもある。

この視点から、『遠郷の冬めく夜』を

眺めてみると面白いことが分かる。(あくまで、一人の温泉ファンによる妄想であることは、念頭においていただきたい)

注目すべき点は脱衣所だ。

駅近の混浴露天風呂には、混浴にも関わらず男女別の脱衣所があり、その先に風呂がある。この形式からは、明治以前の混浴温泉が営業を続けていくうちに、脱衣所だけでも男女別になった過程を連想する。秋田の乳頭温泉郷・鶴の湯温泉や山形の滑川温泉・福島屋の露天風呂などがこの形式である。

また、高台の個室も畳敷きの和室に床の間や、窓付近のテーブルが置いてある例の空間(広縁)もあり、現実の温泉旅館でもよくある形式だ。雪が降り積もる温泉全体の風景を眺めながら、広縁で一杯飲むのはとても楽しい。

つまり、これらの建物は形式として現実の温泉旅館とさほど違いがなく、浜名湖畔から芦ノ湖畔へ移築した龍宮殿本館のように、別の場所から移築した建物と変わらぬ違和感がない。もしかすると『遠郷の冬めく夜』開業当初からある最初の建物かもしれない。

バーチャルでも 温泉旅行気分にあひたる

一) のワールドのポイントは二つの旅館にある客室と浴槽。フレンドと一緒にバーチャルで温泉を楽しんだり、客室で睡眠とったり、食事をしたりなど楽しみ方も様々。旅館で最高の楽しみ方を味わいましょう。





遠郷の冬めく夜

-Nostalgic Winter Night-

By あっと

冬の景色と川沿いの夜の温泉の風景をモチーフとしたワールド。



ACCESS

て、そのような妄想を許容できるほど、『遠郷の冬めく夜』は冬の温泉旅館としてあまりにも完成度が高い。温泉の風情を楽しみた。VRChat民にも、現実の鄙びた温泉旅館を巡る趣味を持つ温泉ファンにも、共におすすしい希有なワールドである。

(文：わく)

それと比較すると、駅から川を渡った先にある温泉旅館はどうだろうか。内風呂の脱衣所は男女別に分かれておらず、風呂も混浴である。仮に現実でこのような形式の内風呂があるとしたら、男湯か女湯か入口の暖簾で伝える必要があるが、そんなものはない。それは旅館の真下にある大露天風呂でも同様である。

こうは考えられないだろうか。『遠郷の冬めく夜』は開業当初、駅近の混浴露天風呂と高台の個室のみから成り立っており、それらは現実からバーチャルへ移築したからこそ、男女別の脱衣所や和室の広縁など、現実でもありえる建築形式だった。

ただ、VRChat民から人気が出てくるにつれて、新館として温泉旅館を新たに建設する必要が出てきた。VRChatはどのようなアバターであっても、一緒に温泉に入ることには心理的抵抗はない。そのため、脱衣所は男女別に分ける必要はなく、バーチャルに特化した温泉旅館として建設されたのだと……。

これは東北の湯治宿を中心に、つげ義春の漫画に出てきそうな鄙びた温泉を巡る趣味を持つ自分にとって、十分にありえると感じる仮説的な妄想である。そして



途中下車

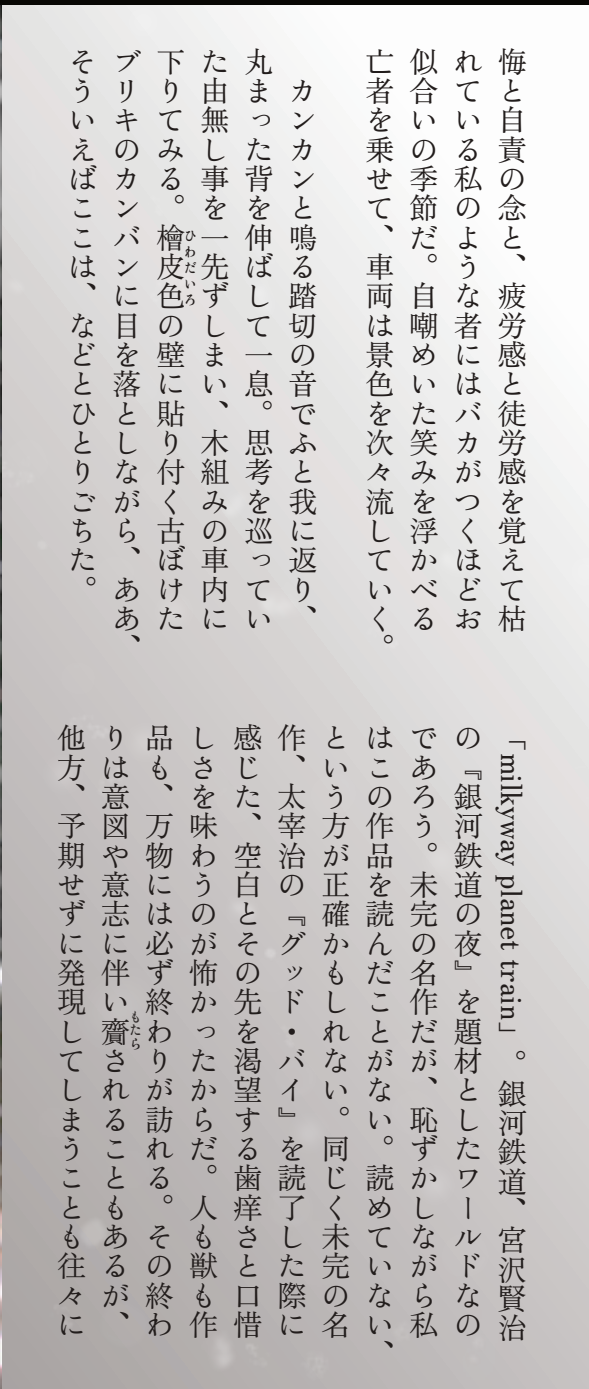
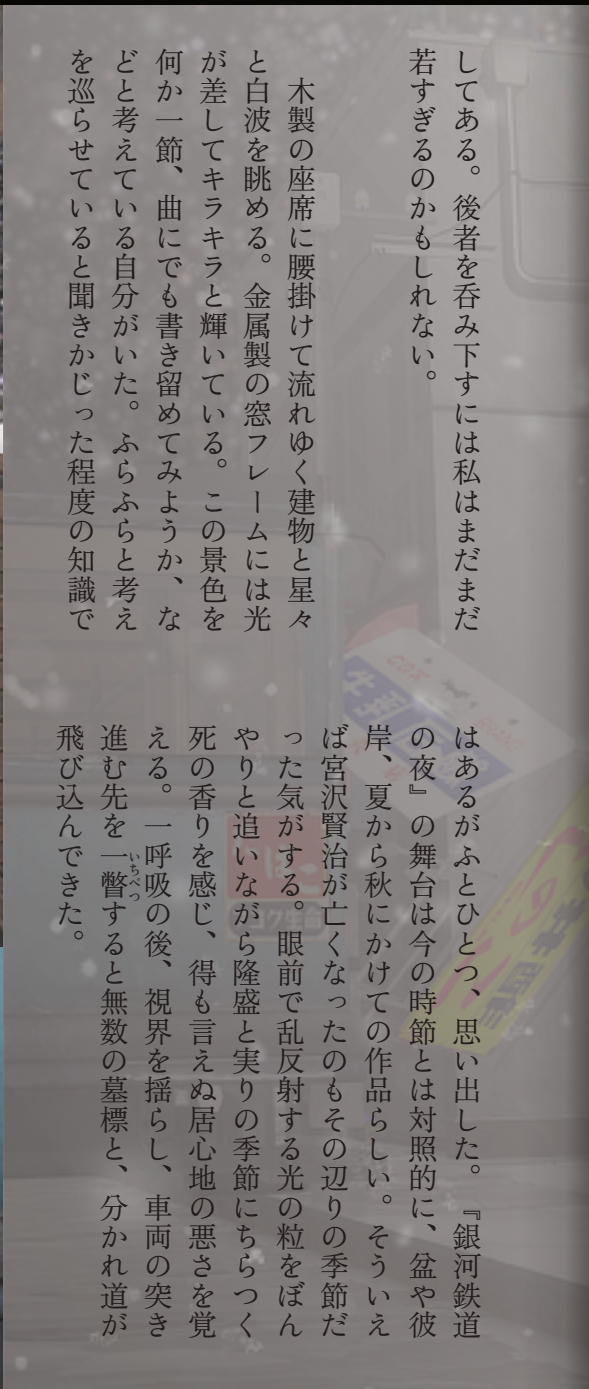
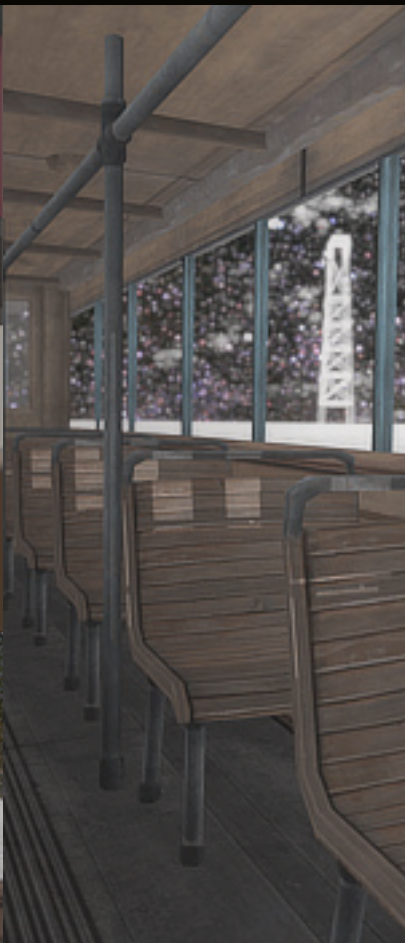
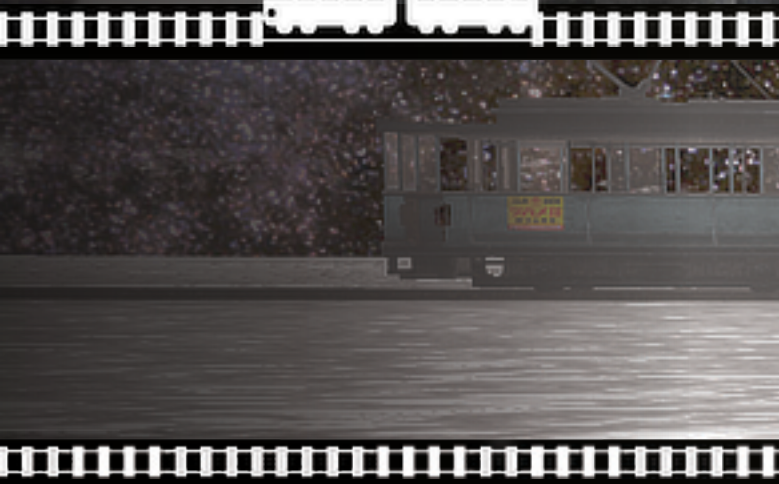
ヤマノケ

写真/Tokikaze

線路を漕いで進む車体から望む果てのない白波は、降り積もった雪のように見える。季節は冬。私はこの冬という季節を「死んでゆく季節」だと考えている。草木は枯れ、老人のように背を曲げて萎れた枝が、いづれ帰っていく場所となる地面を向き、その地の下で動物たちは背を丸めて眠りに就いている。生命の芽吹く春、隆盛する夏、実る秋。続く季節は、興隆の余熱と亡骸のように残った枝葉を葬る「冬」だ。がむしゃらに進んだ先で乱雑に踏み均した自身の足跡を振り返り、限界と後

眩
い銀河を臨む白波の間に一筆の線。それを一心に進む鉄道のその背に登り、くすんだカーペットに腰掛けてからというもの、私はもう長い間その場所を彼方を見つめながら呆けている。心新たに迎えるべき年始の折に、何となく幸福な気分になれなくて、浮足立つ世情の住処のような明るいワールドには食指が動かず、明度の低いワールドへと越冬する動物かのようにのそのそと吸い込まれていた私は、果てにこの鉄道へとまたもや足を踏み入れてしまった。漫然と、雑然と、何も手につかず逡巡する日はどうしてもこのワールドに迷い込んでしまう。空を跨いでぬうつと伸びるいくつかの線路を仰ぎ、車輪がレールと呼応してあげるトントーン、シャリシャリという音を聴きながら、私はいつまでも、ずっと、途方もない妄想を脳内で茹で上げているのだ。何万人とアクセスしているらしいこのソーシャルアプリの別のワールドではきつと今、誰かと誰かが笑い合い、楽しみ、生き生きと今日という日を過ごしているのだろう。彼らと比べればさながら私は亡者か何かのように映ってしまいたいようだ。





悔と自責の念と、疲労感と徒労感を覚えて枯れている私のような者にはバカがつくほどお似合いの季節だ。自嘲めいた笑みを浮かべる亡者に乗せて、車両は景色を次々流していく。

カンカンと鳴る踏切の音でふと我に返り、丸まった背を伸ばして一息。思考を巡っていた由無し事を一先ずしまい、木組みの車内に下りてみる。檜皮色の壁に貼り付く古ぼけたブリキのキャンバンに目を落としながら、ああ、そういうえばここは、などとひとりごちた。

「milkyway planet train」。銀河鉄道、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を題材としたワールドなのであろう。未完の名作だが、恥ずかしながら私はこの作品を読んだことがない。読めていないという方が正確かもしれない。同じく未完の名作、太宰治の『グッド・バイ』を読了した際に感じた、空白とその先を渴望する歯痒さと口惜しさを味わうのが怖かったからだ。人も獣も作品も、万物には必ず終わりが訪れる。その終わりは意図や意志に伴い齎されることもあるが、他方、予期せずに発現してしまうことも往々に

してある。後者を呑み下すには私はまだまだ若すぎるのかもしれない。

木製の座席に腰掛けて流れゆく建物と星々と白波を眺める。金属製の窓フレームには光が差してキラキラと輝いている。この景色を何か一節、曲にでも書き留めてみようか、などと考えている自分がいた。ふらふらと考えを巡らせていると聞きかじった程度の知識で

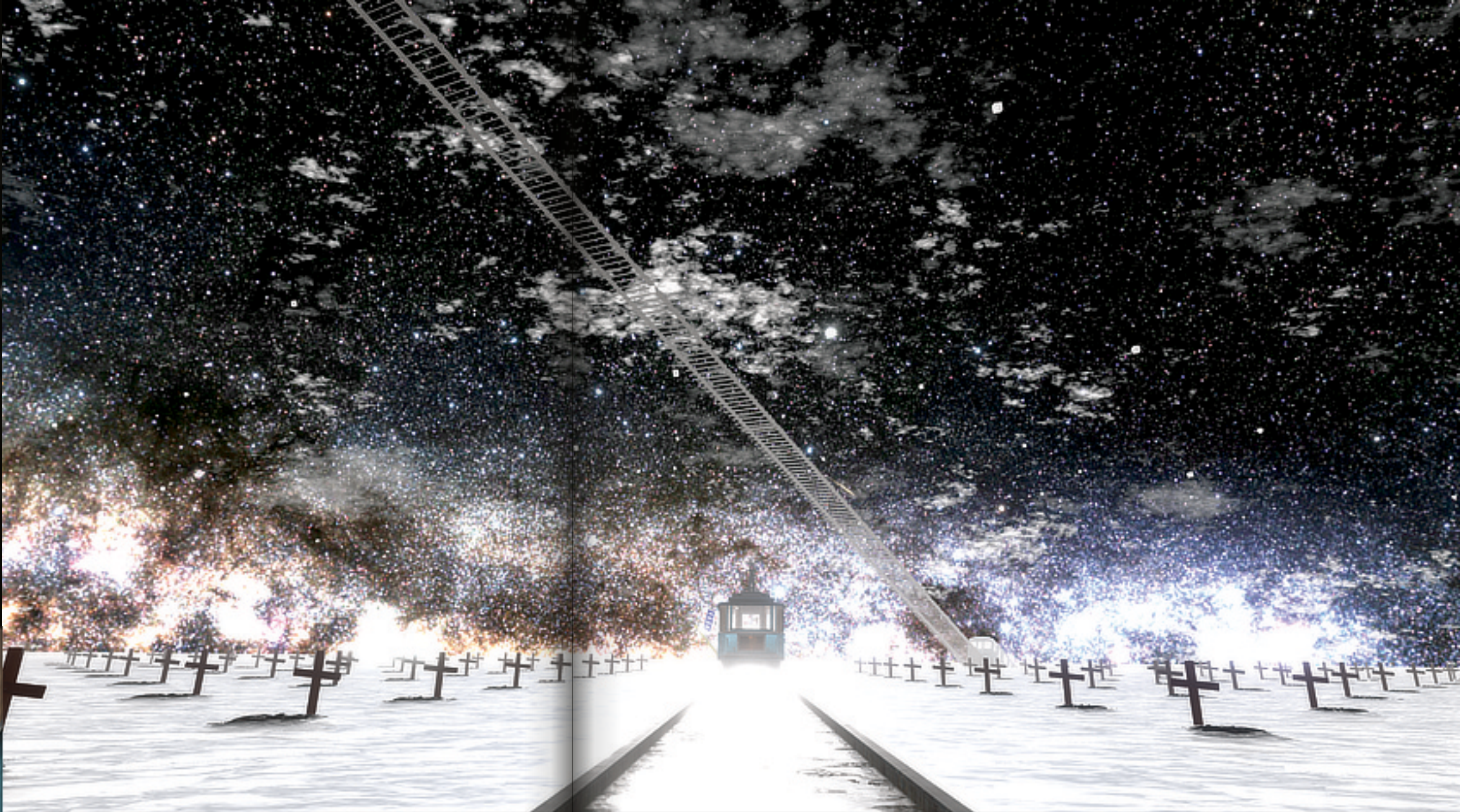
はあるがふとひとつ、思い出した。『銀河鉄道の夜』の舞台は今の時節とは対照的に、盆や彼岸、夏から秋にかけての作品らしい。そういえば宮沢賢治が亡くなったのもその辺りの季節だった気がする。眼前で乱反射する光の粒をぼんやりと追いながら隆盛と実りの季節にちらつく死の香りを感じ、得も言えぬ居心地の悪さを覚える。一呼吸の後、視界を揺らし、車両の突き進む先を一瞥すると無数の墓標と、分かれ道が飛び込んできた。



Milkyway Planet Train

(作：宮野原宮乃)

 ACCESS in VRChat



鉄道の車輪が岐路を噛む。車体は墓標を掻き分け前進する。枝分かれした側の線路の先は、良く見えない。摘まんだ程度の知識だが、あちらはきつとカムパネルラの進む先のだろう。トンネルを突き進み眼前は突如、眩い光に包まれる。予断なく、呑み下す間もなく終わりが訪れる。ああ、と声を漏らすうちに、車両は再び銀河の間の一筆の線の上において、何度も見たはずの光景に気圧された私が立っていた。

痞えていた喉の調子を整えて、長い息を吐きながら座席に座り直す。あの瞬間、物語の主人公の旅が、私が、いやもっと言えば宮沢賢治が、『グッド・バイ』が、冬が、季節が、終わりを迎えたかのように感じた。あの瞬間、私には何が見えていたのだ

ろうか。あまり明瞭な答えは出なかったが、胸にしまっていた由無し事は先ほどよりは幾分小さくなっているように見え、まあいいだろうと、そんなひとりごとをこぼしながら私は今日のワールド巡りを終えることにした。

(文：ヤマノケ)

← To the next PLATFORM.



森の中で よりみち



「よりみちしたい」。VRをやる上で
の目下の悩みは、これである。

VRのいいところは、実質的な移動時

間がほぼゼロということだ。ワールドを
ロードする時間はあるものの、大抵はほ
んの数十秒で目的の場所につく。誰かが
思い付きで「あのワールドに行こう」と
いえば、どれだけ遅くたって、数分後
には全員がそのワールドに居合わせること
ができる。

ただし、この便利さこそが私にとって
の楽しみを一つだけ、減らしているのだ。
移動時間は嫌いな癖に、ちょっと時間を
余らせてしまった時のよりみちが大好き
で、時間があるからといってふと見かけ

た路地に入ってしまうような私は、VR
ではよりみちができないという実に単純
かつ便利な特性に、ありがたいと思いつ
つもいつも消化不良な感覚を覚えていた
のであった。

しかし、そこでよりみちを諦めるわけ
にはいかない。「できない」と言われれ
ばやりたくなるのが私である。いろいろ
と試した結果思いついたのが、「誰かと
VRで会う約束をしたら時間ギリギリま
で別なワールドに行く」ことを「VRよ
りみち」と定義することだった。偶然性

よりみちあすると

ふらふらと

cluster

Crystal forest

写真／ニッソ編集長

青と白を基調とした、凍てつくような不思議な森。その美しさに
思わず足を止めたなら、たまには「よりみち」してみませんか？





よりみちしている時に見つけた、斜めに傾いた黒く四角い石。墓石のようで、謎めている。



森の中にある、氷のようなひんやりとした結晶。吸い込まれたように鈍く光る輝きを放つ。

凍てつくような 青白い結晶の森



たどり着いた その先は

が面白味の一つである本当の意味でよりみちではないのだが、これはこれで少しは楽しめそうだなと思い、最近この「VRよりみち」を続けている。

さて、今日は23時にフレンドに呼ばれている。なぜ呼ばれているのかはわからないが、どうせ、いつものどうでもいい話だろう。なら多少遅れたとしても問題ないし、「VRよりみち」をしよう。そう思って今回はClusterの「Crystal forest」というワールドに入ってみた。

青い。入った瞬間、目がやられるかと思うほどに青かった。青さに面食らいながらも周りを見渡してみれば、ここは氷漬けになった林であるようだ。そこにいるだけで体の芯から冷える気がしてきた。

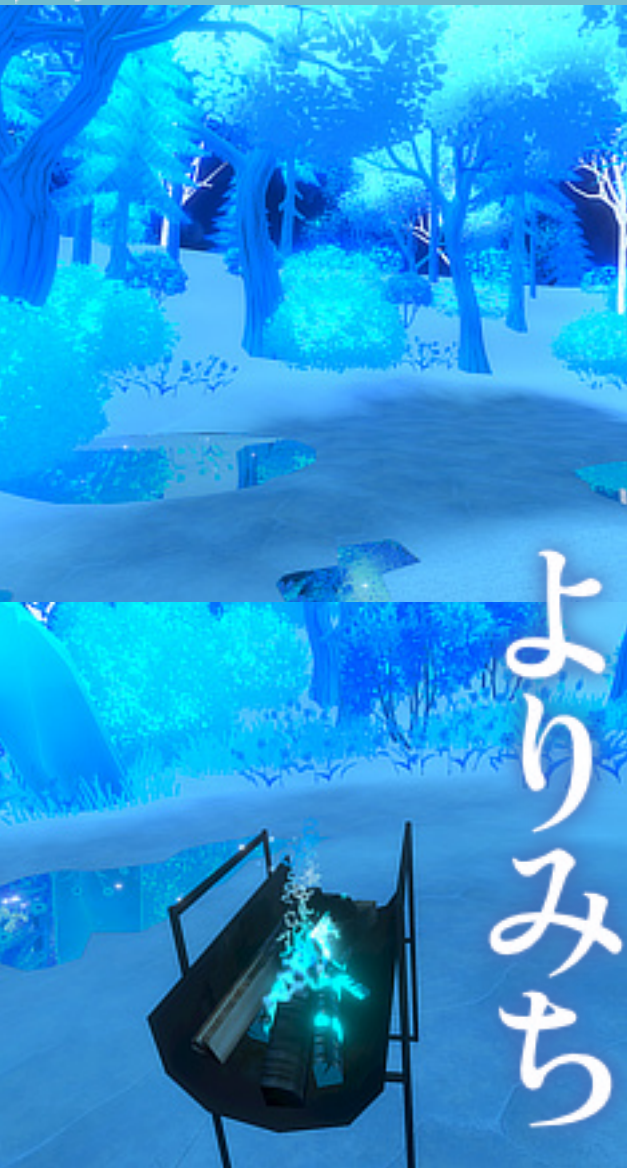
とりあえず、ワールドをめぐってみよう。一応、獣道のような、かろうじて道のようにみえる部分があるのだが、それをなぞって歩くだけではつまらない。「よりみち」にはよりみちを重ねよう。道を外れて、氷の林を進む。青い木、白く輝く木、凍っている水たま

りがあり、足元も凍っている。

そうやって行く当てもなく歩き続けていると、頭の中で、わずかな違和感と共に記憶の扉が開いていくのを感じた。何故？冬、雪……。そういえば、リアルワールドの冬の色は、自分にとっては白と灰色だった。記憶の中の冬の情景は、いつも曇り空から降る雪と共にあった。膝ぐらいまで積もった雪に大の字になって寝転んで、灰色の空から雪が降るのを見ていたこともあった。

まだまだVRよりみちは続く。斜めになっていいる石をみつけた。若干黒くて、四角いその石は、なぜか墓石に見える。一面が凍り付いていて生気を感じないからだろうか。

先ほど開いた記憶の扉はまだ閉じられていなかった。また自分の冬の記憶が蘇ってきた。夜中に目を覚ましたら、全ての音が雪に吸われてしまったかのように静かだった。その時も、あまりの静けさから、まさか自分以外の全てが凍り付いてしまったのではないかと怖くなった。その時は、確かあったかいけど本当に重い布団にくるまって、



よりみち

記憶の

Crystal forest By DW164

青と白を基調とした美しい結晶の森。
冬でワールド巡りする時におすすめ。

 ACCESS

(文…ニッソ編集長)

に入るとそこは一面桜色。「おっ、来たか。ちょっと早いけど花見用のワールドあったし、花見でもしようと思ってるな」。

もう花見？ああでも確かに、昨日は平年よりやや暖かかったらしい。日も伸びてきていた。ここからはまた寒くなるそうだが。三寒四温というが、どうやらリアルワールドの季節も、ふらふらとよりみちしながら、それでも確実に、少しずつ、いつかやってくる春に向かって歩いていた。

歩き続けると

なぜかよみがえる

恐怖を追い払うように、必死に寝ようとした。

このワールドを歩きつづけると、様々な記憶が蘇ってくる。それらの記憶は、なんでもない時のなんでもない瞬間の記憶ばかりで、覚えておくべきターニングポイントから外れた、細い路地に転がっているような、記憶のよりみちをしないと見つからないような、そんな小さな記憶ばかりだった。

いつの間にか林を抜けて、避けたはずの道の上を歩いてきた。このよりみちもそろそろ終えて、終点に向かおうか。滑らないように気をつけながら歩みを進めると、終点には青い炎が灯っていた。炎まで青いのか。青い炎を見つめていると、また記憶の路地裏に迷い込みそうになる。あれは確か…。

ピピピ。タイマーがなる。もう22時55分。VRよりみちのタイムリミットだ。友達のところに行かなくては。急いで移動する準備を整えながら、今回のよりみちはなかなか楽しかったなと思う。

移動して、友達に合流する。ワールド



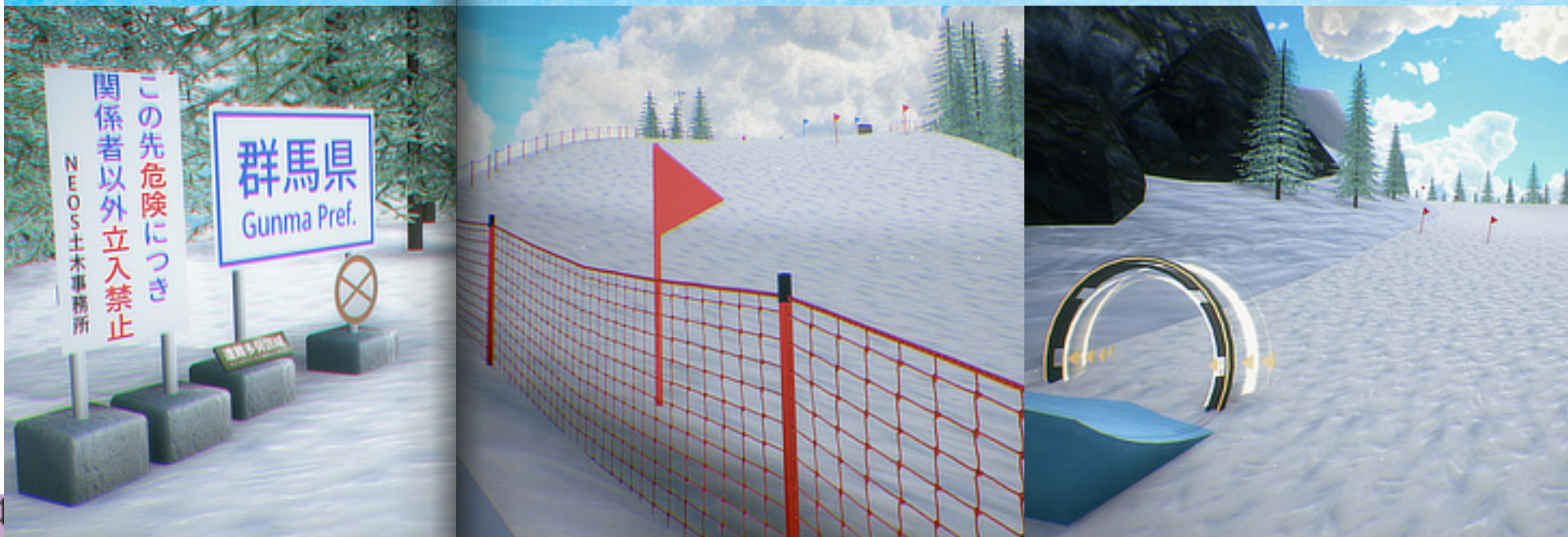


新感覚のスノボワールド

Snow board

シーズン2

写真 / オージュ



本 題に入る前に一っだけ強調したい。このゲームワールドは無料で遊べるし、VRデバイスのない方（デスクトップ勢）でも楽しめる。

「Snow board シーズン2」とは、その名の通りスノーボードで遊べるワールドである。初代のワールドも存在するが、シーズン2はつい最近（2023年1月上旬）に公開された新しいワールドだ。初代はデスクトップ操作に対応していなかったが、なんとシーズン2はデスクトップに対応した。

著者も実際に遊んでみた。著者は雪国

の生まれでありながら、実はスノーボードやスキーをやったことはない。私の生まれ育った場所では、スケートリンクが近くにあったが、雪山からは遠く離れていた。雪山に行くのが億劫なあまり、スノーボードやスキーを楽しむ機会を見送ってばかりだったが、今回VRにてようやくスノーボードデビューという訳だ。

雪山の頂上でボードに足を乗せると、勝手に前方へと進んでいく。これが下りの斜面を意識させ、否が応にも重力という自然法則を、そして雪は滑るといふアリティを思い起こさせた。

いざ最初のゲートを通り抜け、タイムの計測がスタート。私はぎこちない重心移動で、なんとかコースから外れずに滑るので精一杯であった。

ややあって、シーズン2からの新要素、ダッシュゲートを通過する。レースのビデオゲームでよくある加速パネル的なもので、通過と共に一気に速度が増すのは爽快であった。

そして、そのダッシュゲートとハーフパイプ（所謂ジャンプの為の勾配）を組み合わせたここの一番で、私は思い切りコントローラーのスティックを倒す。上向



ボードをカスタマイズしよう!



熟練のNeosVRユーザでは高度な改造ボードを作った人がある。段ボールやタライなどいろいろ。

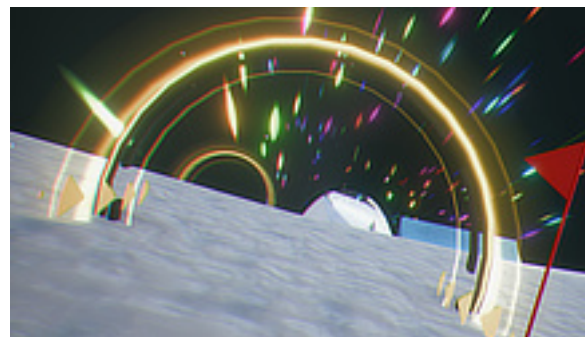


ボードの右隣には「ボードカスタマイズ」。大きさや位置、背面のカラーを設定できる。

スコアアタックで競え!



赤いゲートを通過した数だけスコアは低くなる。速さだけでなく、正確さも求められる。



新たな要素、ダッシュゲートを通過すると加速。ゲートをくぐってライバルに差をつけろ!

銀世界を疾走する自分、あるいは他人を、ピタリと追従するカメラで撮影できるのは、VRならではの強み。大会の様子はYouTubeにて、「VRスノーボードランプリ! パーチャル銀世界を駆け降りろ!」の題名でアーカイブ化されているが、興味があれば是非ご覧になって欲しい。

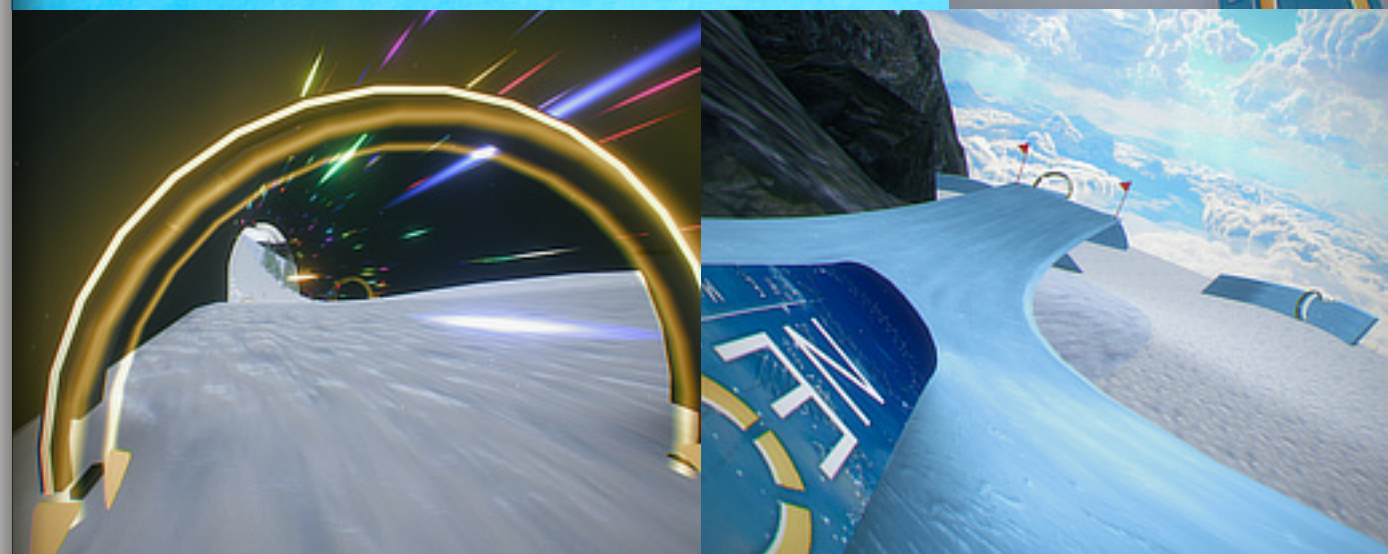
銀世界を疾走する自分、あるいは他人を、ピタリと追従するカメラで撮影できるのは、VRならではの強み。大会の様子はYouTubeにて、「VRスノーボードランプリ! パーチャル銀世界を駆け降りろ!」の題名でアーカイブ化されているが、興味があれば是非ご覧になって欲しい。

最初のゲート(二本の青いフラッグ)を通り抜けると、計測が開始される。ゴールまでの速さのみならず、コース要素にある赤いゲートを通過した数だけ、スコアは低くなる。如何に速く滑られるか、それでいて正確なコース取りができるか、これを競い合うのは非常にアツイ。オレンジ氏が大会を主催する前から、Neos VRのユーザー同士でスコアアタックを行っているようだ。

そう、大会である。本ワールド作者のオレンジ氏は、2023年1月14日にVRスノーボードランプリを開催した。1時間という大会時間内で、最もスコアが良い者が優勝というルール。(スコアの数字は低いほど高評価)

外が雪山を滑る。これぞまさにVRならではのカオスな光景だ。

Let's play Snow board!



とここで、滑るためのボードそのものについてだが、これはデフォルトで用意されているものとは別に、自作が可能である。ワールドに入場したら、まずは左前方にある「ボードをもらう」を選択しよう。そして現れたボードを、今度は向かって右側にある「ボードを置く」の所まで持ち運び、離す。すぐ右隣にある「ボードカスタマイズ」のカメラアイコンを選択し、「撮る」で撮影するだけで完成だ。あなたのアバターがボードに刻まれた、オリジナルのボードで滑ってみよう。

きに何度も回るバックフリップを繰り返したのだ。天と地が目まぐるしく交代する高速縦回転。なるほど、縦の回転はVRでもかなり珍しい。とても新鮮な感覚だった。ふいに、あの感動を思い出す。VRデバイスを初めて利用した日、360度に広がる光景を見回した時の。

ちなみに熟練のNeosVRユーザーともなると、更に高度な改造ボードも作成できるようだ。ティッシュ箱や段ボール箱更には布団やタライなど、最早スノーボードの定義に一石を投じるようなものが多数。大会にて数多くのスノーボード以



VRデバイスを持っている者ならボードの右にある操作方法の説明文があります。

PCデスクトップで ゲーム操作方法

A キー	左に移動
D キー	右に移動
マウス	視点移動
スペースキー	ジャンプ

Snow board シーズン2

By オレンジ

VRでもデスクトップでも楽しめる
冬にピッタリなゲームワールド。

 ACCESS

自分を真上から撮影するのも、前方から撮影するのもお手の物。映画さながらのカメラワークが撮影できる、非常に「動画映え」するオイシイワールドなのだ。実際、SNSにも動画の「自撮り」が多くアップロードされている。

最後に操作方法について。VRデバイスを持っている者ならば、現地に行けば説明文が書かれてあるので割愛。冒頭でも述べたように、本ワールドはVRデバイスを持っていない方々でも楽しめる。以下にデスクトップPCでの操作方法を

記述することで、本ワールドを端緒としてVR世界への誘いに代えたい。

まずは「ボードをもらおう」をクリック。出てきたボードを再びクリックして「アンカーに入る」を選択。するとゆっくりと滑りだすので、そのままコースに向かえばスタートだ。あとはAキーで左に、Dキーで右に移動。マウスで視点移動、スペースキーでジャンプ。ダイナミックな動きでゴールを目指そう。

途中、コースから外れて戻れなくなっ

てしまうかも知れない。その場合は第三クリック（通常、マウス中央のスクロールホイールを押下）で出てくるメニュー、その左下にある“Snow Board”をクリックし、さらに“Restart”をクリック。これによってスタート地点に戻ることができる。

スノーボードから降りるときには、自分の前足付近を見下ろすように視点を動かし、ボードに描かれた矢印のアイコンをクリックしよう。ボードから降りたら、記念写真も忘れずに。

(文…sun)

製作者の
オレンジさん!

VRスノーボード
グランプリ
2023.1.14

スノーボードで挑む
挑戦者たち!

上位には
トロフィー!

みんなで
集合写真!

●スノーボードグランプリについては [Youtube](#) でご覧になります。

大 い な る も の



写真／思惟かね

戸隠五社



冬

とは終わりの季節であると同時に、
始まりの季節でもある。寒さの中で
春を待つ冬芽のように、私たち
もまた冬の中に始まりを望む。
そう、新年の訪れである。いよ
いよ雪深くなる年の瀬に、私が
長野県は戸隠を訪れたのは、こ
の神さびた地で新たな良き年を
願うためだった。

霊峰である戸隠は「宝光社」
「火之御子社」「中社」「九頭
龍社」「奥社」の五社からなる
戸隠神社とともに知られる。こ
の全てを巡る五社参りで一年を
締めくくろうというのが旅の趣
旨だ。

麓から順に、まずは宝光社へ
赴く。白雪を冠に佇む、木に注
連縄の鳥居が、ここから先は神
域だと告げている。ざく、ざく
と雪を深く踏みしめ、雪に埋も
れた狛犬を見やりつつ参道を登
れば、樹齢幾ばくか想像もつか
ない巨木の森の先に、宝光社の
本殿がある。精緻な彫刻と巨大
な社、そして木に刻み込まれた、



標高三五〇mの社。そこからなお天高くに見上げる峰の鋭さは、戸隠の霊山たるゆえんを無言の内に語る。一説には奥社と、地主神たる九頭龍大神を祀る九頭龍社の歴史は二千年を超えるという。その有形無形の圧倒される「なにか」。それが先の社の荘重さにも感じたものと同じと気づく。



日が暮れる前に五社参りを無事終えて、肩で息をしながら雪道を下りながらふと思う。どうして私は年の瀬に、こんな大変な思いをしているのだろうか？
宿に入り、夕食を済ませるといよいよ年の終わりが近づいてくる。N響の第9に耳を澄ませているうちに時計が二十三時を回る。時間だ。

人の及ばぬ数百年の年月の風合い。圧倒され、思わず居住まいを正す。神を感じるとは、こういうことだろうか。

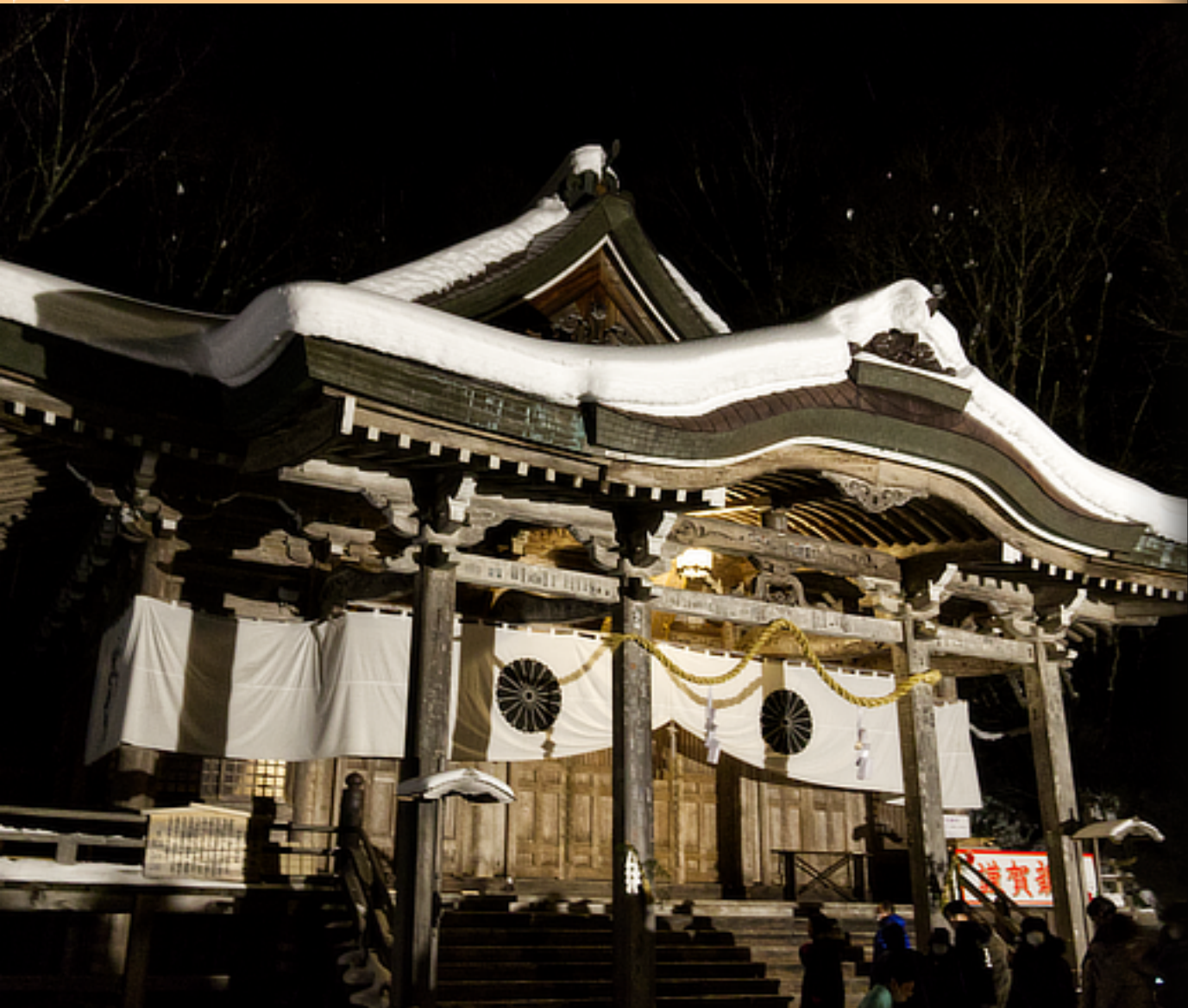
二礼二拍手一礼を済ませ、次いで巡った火之御子社は、宝光社に比べて佇まいは小さいが、ぽっかり開けた境内には人影も少なく、好ましい静謐な空気が漂う。そして矢継ぎ早に戸隠の中央に座す中社へ参る。戸隠の顔でもある大鳥居には人通りも多く、一転して観光地の様相だが、宝光社以上に荘重な社の構えや、御神木の巨大さにはやはり圧倒される。ここは私が名前を頂戴している八意思兼神やこころおもいかねのかみが祀られる社でもある。深々と礼をして、次は奥社を目指す。

ここからが難物で、宝光社から中社は徒歩圏内だが、奥社と九頭龍社は中社から2キロ登った駐車場から、さらに2キロの雪の山道を徒歩で登らねばならない。参道はやはり木製の鳥居から始まり、道半ばに朱色の随神門が待つ。そこを抜けると、次に待つのは言葉を失うほどの巨木の門だ。その奥の上りは一際険しく、息も絶え絶えになりつつ登った先に、ついに奥社と九頭龍社が見えた。



長野や新潟には「二年参り」という風習が残る。年の瀬、日付が変わる前に神社へ詣で、そのまま年を明かしてお参りするのだ。二年に渡って参るので二年参り。これは初詣の原型となった、大晦日の夜と元日の朝の「除夜詣」「元日詣」が形を変えたものだという。
いそいそと厚着をして、宿から中社を目指す。寒さに震えながら本殿の前へ登





ると、三十人ほどが新年の訪れを今かと待っている。先程の問いが蘇る。なぜ皆、夜中にこんな苦勞をしてまで社を訪うのか。

気づけば辺りで自然とカウントダウンが始まる。五、四、三、二、一：年が明けると同時、本殿の扉が開かれ、わっと人々がお参りを始める。慌てて私も、さて何を願ったものかと今更考え始める。どだい神に託す願いなど持ち合わせていない。そもそも神を信じてはいないし、自分で叶えられない願いとは、つまりどうしようもない願いだからだ。

ふと見ると、ちらちらと雪が舞い始め

ていた。その向こうに見上げた中社の荘重な本殿に、昼間参った五社の本殿や、戸隠の峻厳な峰々が不意に重なる。それが皆まとっていた、思わず居住まいを正すような神さびた、圧倒されるあの空気分。数百年、数千年を経た、人には及びもつかない大いなるもの…。

ああ、そうか。こういう大いなるものだからこそ、自分では、人の身では叶わぬ願いを託せるのか。

元より神などいない。霊峰の峰々も、壮麗な神社の社も、人が見つけ、人が作り、祀ったものだ。だからこそ、そこに

神はおわす。何かを託せる大いなるものを、人は在ってほしいと願い、それを神と呼んだのだ。思えば昔の人々も、今の私たちよりも信心深かったわけではなく、ただ彼らに託さねばならない願いが大きかったのだろう。多くを科学に託すことができる我々と違って。戸隠神社にも名残を残す、神も仏も一緒に拜む神仏習合の大雑把さも、結局日本人にとっては神も仏も等しく「大いなる存在」であったからだろう。

皆、漠然と大きなものに何かを託しているにすぎない。苦勞をして、功德を積んで病が治るわけでもない。それでも託さずにはいられない。額に汗して山深い奥社に参るのも、深夜に年をまたいで詣でる勞をとるのも、願いという形無いものをその行為に託して、大いなるものに見えるためなのだろう。それは人の弱さであり、そして救いなのだと思う。

私は心に秘めた、叶わぬ願いを大いなるものに祈った。そして託した。

戸隠の峰と社は何も言わずにそこに佇み、私たちを見ている。私たちが絶えて果て、何百年が経とうとも。

きっと、今年も良い年になる。

(文：思惟かね)

Gravure : 星屑ノ街 -city of stardust- station

撮影：みくにき



VR CHAT

遠郷の冬めく処

執筆：わく
撮影：Tokikaze



Milkyway Planet Train

執筆：ヤマノケ
撮影：Tokikaze



cluster Crystal Forest

執筆&撮影
：ニツリちゃん



neos Snow Board シーズン2

執筆：sun
撮影：オージュ



戸隠神社 執筆&撮影：思惟かね



ニツリちゃん
編集長

電車の扉が閉じる。走り出す列車。冬を過ぎる。きっと君は大丈夫だから。次の駅は「工場/機械」です。桜花とともに、切符をポケットにしまって。

思惟かね
編集/デザイン

冬は不思議な季節です。終わりの季節ゆえの情緒。寒いからこそその温かみ。そして今日もこたつからの脱出に失敗しました。

SUN
ライター

「打ち合わせするよりも、sunさんが好きに書く世界で生きてみたい」と執筆依頼いただくことが増えました。VRに転生し、ある意味無垢で自由になった魂を、美しい枠組みに収め、VR生活を豊かにするやりがいのあるお仕事です。

みくにき
カメラマン

夏から更に電気代が上がったので懐が冬です。

わく
ライター/校正

オフラインでもバーチャルでも、冬の温泉の風情がとても好きです。

ヤマノケ
ライター

冬は日照時間が少なく低気圧になりがちで気分が塞いじゃいますよね……春が待ち遠しい……ただし花粉 テメーはダメだ

オージュ
カメラマン

冬になるたび、生まれて初めてのアルバイトだった郵便配達の仕事思い出します。寒さに耐えて仕事をされている方々に、日々自分たちの生活は支えられていることを忘れずにたいです。

Tokikaze
カメラマン

暑いかな寒いかな寒い方が苦手な僕ですが、凍てつくような寒さの冬の匂いはとても好きだったりします。言葉では表せないあの匂い。あれは雪の匂いとも言うんですかね。さて、話は変わりますが、今回の初稿遅刻しました(戒め)

Nag
校正

東北民的には冬=試練でしかなかったのですが、静謐だったり、新競技を発明したり、(VR)湯に(現)身を溶かせたりと様々な冬の印象を本号で頂けました。多謝!

燕谷古雅
編集/デザイン

今回内容が増えました。日にちが迫られた時がくると、同人をやっていた頃が懐かしく感じます。「修羅場」ですね。

STAFF 編集長 | Editor Chief
ニツちゃん
誌面デザイン | Graphic Design
思惟かね
燕谷古雅
校正 | Proofreading
Nag

執筆 | Writer
わく
ヤマノケ
ニツちゃん
sun
思惟かね

撮影 | Photographer
みくにき
Tokikaze
ニツちゃん
オージュ
思惟かね
わく(裏表紙)

感想などは #Platform通信欄
へぜひお寄せください!

2023. 3. 1

*Our
Journey
Continues...*

Platform

Vol.4 雪窓辺、
雪、VRにて。